

「ねえ、助けてやんなよ。友だちなんですよ、ねえったら」

リエが腕をつかんでゆすった。

亮は、ゆすられるまま、舗道からはみでもみあっている二人を見つめていた。

(助けるったってな……)

英二は鼻血を流している。自分で勝手に地面とキスして出したのだ。

それにどう考えたって、こっちが悪い。

「馬鹿野郎！」

英二が半泣きの金切り声でもう一度むしゃぶりついた。案の定、腕をつかまれ、地面に叩きふせられる。

がつちりとした四十代の男だった。ウールでできた濃いグレイのコートを着ている。

連れの女は、数歩離れたところで騒ぎを見つめていた。色白で細面、着物をきている姿は、なんだか病みあがりのような頼りなさがある。

きつと恐ろしくて声も出ないだろう、亮は思った。

「もう立つなよ」

男が低い声でいった。尖ったブーツの先が、英二のネックレスを巻いたシャツの胸元にくいこんでいる。

英二は答えずに泣きじやくるばかりだ。

「すんません……」

亮はいって進み出た。男は足を仰向けになった英二の胸にかけたまま振り返った。

(どうってことのないおっさんなんだけどな……)

白髪が前髪に混じっている。息を切らした様子もなかった。ふくみ綿でもしているかのよように、頬に肉づきがあった。

「あやまります、勘弁してやって下さい」

亮はいって頭をさげた。本当にこちらが悪いのだ。どうしたって、英二の味方をして、男に喧嘩を売ろうという気はおきなかった。

ましてや、高校時代、なまかじりの拳法を自慢にしていた英二があっさりのされた今は。

男は亮を見やり、すつと足をどけた。

「若いからエネルギーが余っているのはわかる。だが、やっていいことではないな」

「は、」

殊勝に頷いて亮はうなだれた。次いで、英二を腹の中で罵る。このタコ！

場所は麻布十番に近いディスクの前だった。リエは、ディスクに入るための通行証、本当は中でうまくOLでもつかまえるつもりだった。

——女子大生とはいわねえよ、OLでいいよ、OLで。この年の瀬にひとり寝はつらいからよ

英二は勢いこんでいた。そのアテが外れた。まるきりのカラ振り。バーゲンで揃えたDのスーツも威力なしときた。

アツくなった英二は、店を出て、前に駐めてあった車に八つ当たりしたのだ。

「こんなところに駐めんじゃねえよ。田吾作め！」

ドアを蹴り、ミラーを蹴った。車はマセラティだった。

「よせよ、外車だぜ」

「だからなんだよ。大丈夫だよ、ヤクザはイタリア車なんかに乗らないって」

英二は調子づいて、ボコボコ蹴ったものだ。そこへ、男と女が隣のレストランから出てきた。

午前三時近く、さすがに人通りは少なかった。

「何をしている」

立ちどまって英二を見つめていた男が訊ねた。まるで通りがかりでもあるかのような低い質問の声だった。

「関係ねえだろ、おっさん」

英二がいきがった。

「それは君の車じゃない筈だ。理由はなんだ、この車が君に噛みついたとでもいうなら、持ち主の俺があやまるが？」

亮ははっとした。男の声はあくまでも落ちついていた。

「君にとつては他人の車かもしれないが、持ち主にとつては、一生懸命稼いだ金で手にいれた車だ。傷をつけて欲しくはないな」

「なにきどつてんだよ。気にいらねえな」

英二が回し蹴りをミラーに加えた。鈍い音と鋭い音が交互に響く。

「やめるよ、英二」

亮が止めたが遅かった。英二はガードレールをまたぎこえ、男につかみかかっていた。一瞬だった。

英二の左手が男のコートの襟をつかんだと思ったら、地面に叩きふせられていた。英二も何が起きたかわからなかったらしい。すぐさまはねおき、蹴りをいれようとした。

男は慌てる様子もなく一歩退いて、英二の足を払った。ハエでも追うような手つきだった。それでも英二の体は一回転して倒れた。

再度立ちあがった英二は、まだ男の強さに気づいてはいなかった。歯のあいだから、

「この野郎」

と吐き出しながら殴りかかり、投げとばされた。膝ひざにつかまり、膝蹴りをくらう。起きかけて、首すじを踏まれる。

いくらなんでも——と思うほどのあつけなさだった。

今、英二は動かなくなっていた。気を失ったわけではあるまい。恥ずかしさとくやしさと動けないのだから、亮は思った。

「すいませんでした」

亮はもう一度あやまった。恥ずかしいのは亮も同じだ。警官は来ないが、さすがに四、五人の野次馬がいる。

最初から見ているれば、英二がまるきり馬鹿をさらしたことになる。許しを乞うてる自分は、その馬鹿の仲間だ。

「修理代、出します」

男は亮を見た。不思議に怖くはなかった。英二が殴りかかったのも、ある意味では納得できた。

男には最初から最後まで、怒りも凄まじみもなかった。まるでひとつごとのように、淡々としている。

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。